

## 転機を迎えるオリンピック

長谷川 修

『東京2020オリンピック』は、緊急事態宣言中で無観客と、これまでにない大会となった。禁足で無聊の身をかこつ筆者は、ついTV観戦となる。馴染みの薄い競技やルールがよくわからない競技もあったが、二週間余も見ていると、思いもよらぬ発見もあり楽しめた。ことに最近の国際スポーツにおけるグローバル化の進展は驚きだった。

男子マラソンは、気温も高く脱落者の多い過酷なレースになった。そんな中、世界記録保持者のケニヤのキプチョゲの大会連続優勝、日本の大迫の六位入賞は立派であるが、興味深いのは二位争いだった。熾烈な争いの結果、二、三、四位はそれぞれ二秒の差で、オランダ、ベルギー、ケニヤの順となった。ラスト三百米程で二位を走るオランダは何度も後ろを振り返り、またゴール後は二、三位のオランダとベルギーが抱き合って喜ぶなど、不思議な光景だった。翌朝の新聞をみて疑問は氷解した。二人はともにソマリアの出身で若い時から一緒に練習していたこと、ゴール直前の不可解な動きは、後ろを走る友人がメダルに届くよう、計り励ましていたのだ。

柔道―久しぶりに見たが、国際ルールは大きく改善されていた―では、混合団体の決勝で日本はフランスに敗れた。フランスの選手は、アフリカの旧植民地出身者やその子女が大半を占めていたが、欧州には二重国籍を認める国が多いからだろうか。

また、難民選手団には、シリアや南スーダン、アフガニスタン等の出身者が選ばれていた。

オリンピックも国際結婚や民族共生が進むと、表彰式での国旗掲揚、国歌吹奏は色あせたものとなる。半世紀以上前、当時のIOCブランデージ会長は何回か国旗・国歌不要論を提案するものの却下されたが、改めて議論されて良い。

また、新種目のスケートボード等の若い選手達を見ると、心から競技を楽しんでいる。国威発揚や国別メダル競争の大会から、本来の参加することに意義があり個人間で競う大会へと戻る転機ではなからうか。